福島県民俗学会 News Letter

ふぉーらむ・F 4

Feb.2017
福島県民俗学会

http://fukushimafolklore.jimdo.com/
fukushima_folklore1971@yahoo.co.jp

平成 28 年度　総会報告

日時：平成 28 年 6 月 5 日（日）13：30 ～ 14：30
場所：郡山市歴史資料館

平成 28 年度の総会ならびに公開講演会・研究発表会は、午前中に研究発表会を 2 本行い、昼休みをはさんで総会・公開講演会が開催された。総会では以下の内容が報告、承認された。

■ 会員異動について

平成 27 年度は退会者 2 名、入会者 5 名で、平成 28 年 6 月 5 日現在の会員数は 68 名となっている。特にホームページのリニューアルや Facebook ページの開設により、インターネットを通じた新入会員が増えている。

■ 役員改選について

平成 28 および 29 年度の 2 年間における役員は以下の通り承認された。

【会長】佐々木長生**【副会長】**岩崎真幸・野沢謙治・小沢弘道**【顧問】**岩谷浩光・鹿野正男・田母野公彦**【会計監査】**大山孝正・相原達郎**【幹事】**鑓水実・相原達郎・村川友彦・大山孝正・石井克玖・丹野香須美・二本松文雄・内山大介・大里正樹**【事務局】**内山大介・大里正樹

■ 決算・事業報告ならびに予算・事業計画

事務局より平成 27 年度の決算と事業報告を行い、会計監査より承認を得たことを報告（当日欠席のため事務局が代理）して満場一致で承認された。また合わせて平成 28 年度の予算案ならびに事業計画についても満場一致で承認された。今年度の事業計画は以下の通り。

平成 28 年度事業計画

日	事業名	場所
28.04.24	第 1 回幹事会	郡山市内
28.06.05	平成 28 年度総会	郡山市歴史資料館
	講演会・研究発表会	
28.06	『ふぉーらむ・F』No.3 発行	
28.10	地域持ち回り研究会（会津）	喜多方市か会津若松市を予定
	第 2 回幹事会	
28.11.19	第 33 回東北地方民俗学合同研究会	秋田市内
28.12	『ふぉーらむ・F』No.4 発行	
29.03.30	会誌『福島の民俗』45 号刊行	

■ 学会創立 50 周年事業について

福島県民俗学会は昭和 45（1970）年度（昭和 46 年 2 月 7 日）に創立し、平成 32（2020）年度に創立 50 周年を迎える。これを節目として、多くの先人達が積み上げてきた功績を振り返り、また学会の新たなスタートと学会活動のさらなる促進や周知を図ることを目的に、事務局より記念事業を行うことが提案された。今年度中に事務局が「学会創立 50 周年記念事業特別委員会」を立ち上げて検討を開始する。（事務局　内山大介）

平成 28 年度公開講演会報告

日時：平成 28 年 6 月 5 日（日）14：30 ～ 16：00
講師：坂本 要氏（筑波学院大学客員教授）
演題：「傘ブクから吊り下げ雛へ
　　―傘と吊り下げ物の民俗―」

坂本氏は仏教民俗、特に念仏をご研究され、福島県にも何度も調査においでになっている。今回の御講演も豊富な事例に裏付けられた内容で、氏の日本全国に及ぶ精力的な調査行の様子が伝わるものであった。

現在では、ひな祭りの吊るし雛は日本各地で趣味の手芸や観光目的などで盛んにおこなわれているが、坂本氏は伝統的な民俗の中に見られる傘や吊り下げ物を網羅的に調査されてきた。古くは 15 世紀に描かれた「祇園祭礼図」などにも、風流傘や吊り下げ物は描かれているという。京都祇園祭では現在も傘型の鉾が出るが、これは他の山鉾などと同様、神の依り代として捉えられている。坂本氏は祭礼のほか、盆行事、小正月行事、祈願などに際して用いられる傘の意味合いについても、日本全国の

講演会の様子

事例から、依り代・予祝儀礼・鎮送儀礼など多様な側面があることを明らかにした。結論として、風流傘や傘ブクについては、「傘を依り代としてはやしながら、神霊を迎え・送る行事」に用いられること、他方、傘に伴う吊り下げ物は、傘につけて送る「身祓い」、七宝や縁起物を吊ることには「招きもの」としての意味があるとした。山形県酒田の事例については祭礼の亀傘鉾がミニチュア化し、やがて雛飾りと共に飾られ、さらに現代の吊るし雛として地域の観光資源ともなっていくという過程が歴史的に辿れるものもあり、興味深く伺った。

講演終了後には、参加会員各位からも「あそこにも」「ここにも」と事例提供が相次いだ。例えば南相馬市日吉神社のお浜下り神事で演じられる芸能では、その歌い手は幕をめぐらした大きな傘の中で歌を唄うという事例がある。場所を移しての懇親会に至るまでそうした議論は尽きず、坂本氏も今後の県内調査に対してさらなる意欲を示されるなど、活気あふれる有意義なひとときとなった。

（事務局　大里正樹）

研究発表会報告

田仲 桂氏「郷土芸能の継承の課題～いわき市における『三匹獅子舞』の事例」

6月5日の午前中に開催された研究発表会では、2本の報告が行われた。まず田仲氏からは、いわき市における芸能の継承に向けた取り組みについての報告があった。事例に挙げられたいわき市江名・下高久というふたつの地域の三匹獅子舞に、田仲氏はいずれも笛や舞の指導者として継承に深く関わっている。前者は東日本大震災を契機に地域コミュニティの再生を目指して芸能が復活した事例であり、後者は存続が危ぶまれる芸能を様々な試みで盛り返そうという活動の事例である。報告者は、郷土芸能は「地域共同体が歩んできた歴史をひもとくことができる手がかりであり、地域の未来を考える材料にもなるもの」という考えから、その継承活動を推進してきた。

担い手の性別や年齢の枠を取り払って多くの人々に芸能への門戸を開いたり、地域行事やイベント等で獅子舞を舞うことで芸能を披露する場や機会を多様化させたり、ワークショップや学習会、映像記録の作成など様々な取り組みに地域内外の多くの人々を巻き込みながら行事全体を活性化させるといった活動について、具体的な事例から報告があった。それまでの型を壊し裾野を広げていくその取り組みは、芸能を従来の閉じられた地域社会から解放し、現代社会に即応したものへと転換させる試みであり、同時に将来に向けて長く継承していくための基礎づくりでもある。当事者として深く芸能に入り込んだ立場からの報告は、我々に大きな示唆を与えてくれた。

また報告者は発表題目について、「民俗」芸能ではなく「郷土」芸能という言葉を敢えて使うことで、当事者としての立場を表現した。筆者はこの報告を拝聴しながら、地域に根付く学会としての役割を改めて考えさせられた。研究者に限らず、生活者や継承者、行政、愛好家などの多様な立場の人々がともに地域の生活文化を考えるのが当学会の大きな目的の一つであり、「郷土」か「民俗」かといった語彙の選択に表れる個々の立場性・当事者性の枠を超えて議論し共存できる場づくりは、震災を経験した当県の民俗学会として今後さらに求められるものと考える。（事務局　内山大介）

大里正樹氏「会津のお日市について」

会津若松市の市街地を中心に、7月1日から約1ヶ月間、オヒイチ（お日市）とかオヒチと呼び、小字単位の町内の夏祭りが毎日のように各地で行われている。「お日市」の呼称の由来については不明であるが、狭い地域の神社・仏閣の縁日にかつては市が開かれたものに由来するものと推測される。

宝永元年（1704）の佐瀬与次右衛門著の『会津歌農書』下之末「農人奢」に、「春の花夏ハ日市の見物に　其もよしやおごる農人」とお日市に関わる記述がある。若者がお日市の宵祭りに各地を踊り歩き、農作業を怠ることを戒めた一句であろう。こうした風習は昭和30年代まで、見られたという。この記述は、お日市の歴史を物語るうえで、注目すべきであろう。

お日市の民俗については、その分布と祭礼日等の概説的な調査・研究にとどまっている。大里氏はそうした先行研究を踏まえ、平成27年の祭礼を調査・研究した上で発表を行った。その一事例として、会津若松市上一之町・上二之町の「津島天王祭礼（おてんのうさま・きゅうりのかみさま）」について、祭礼状況を中心に、参拝した人に配られる御札（オゴフ）をはじめ、「津島神社大祭記録（昭和41年～現在）」の記録の分析を通して、現在行われているお日市の民俗について考察した発表で

津島天王社への参拝

ある。

お日市は町方と村方との交流が民俗的な背景にあるという仮説を前提に、大里氏は津島神社のお日市における会津美里町（旧新鶴村）出戸田沢・入田沢両集落からの代参を通じて、具体的な信仰状況の調査を行った。両集落では「津島講」により現在も毎年初穂料を奉納している。代参により受けた２枚の札は村内・家内安全の祈願として、１枚は集落内の寺院前に道切りとして立てられ、また割箸にはさまれた小札は各戸の神棚に奉納されるという。本発表は、お日市の信仰の具体的なあり様について明らかにした研究発表と言える。

（会長　佐々木長生）

福島県内 文化財の動き　南相馬市鹿島区江垂 日吉神社のお浜降り

平成 28 年４月２日、南相馬市鹿島区江垂の日吉神社で東日本大震災後としては初めてとなる「日吉神社のお浜下り」が行われた。これは 12 年に１度の申年４月に神輿を烏崎の浜に遷し、潮水を神輿に献納する祭で、神輿行列には旧真野村の各地区から宝財踊り（ほうさいおどり）・神楽・手踊りなどの民俗芸能が奉納され、盛大な規模と由来をもつ（福島県指定重要無形民俗文化財・国選択無形民俗文化財「日吉神社のお浜下りと手踊り」）。

日吉神社の縁起は、康永元年（1342）に落城した霊山城から北畠顕家卿の家臣が卿の遺児とともに山王権現を奉じてこの地に至り館を築いたといわれる。また、敵の中を逃れる時に七福神に変装したことが宝財踊りの起源という。日吉神社は日枝神社（東京都千代田区。日吉山王社・山王権現とも称する。）の末社で、山王様とも呼ばれる。申年に例大祭を行うのは、猿は山王の使いと考えられているためである。なお、江戸時代初期から中期に泡斎念仏（ほうさいねんぶつ）という踊念仏の一種が流行したが、慶長年間頃に常陸の泡斎坊という僧が勧進のために始めたと伝えられ、鉦・太鼓を打ち噺した狂乱的な踊念仏であったようである。

潮水を神輿に献納

お浜下りには、神輿行列に供奉して、建場（たてば）と呼ばれるお旅所で奉納される。浜下り神事は神が海岸に下り、桶に汲んだ潮水を神輿に奉納することで潮垢離の禊を行い、神の霊力を蘇生復活させて再び神社に戻るという行事である。また、浜下り祭場となる海岸の多くは神が海から来臨したという漂着神伝承を持つ。烏崎海岸は、南相馬市でも特に浜下りが多く行われるが、その中にあって日吉神社のお浜下りは参加者と供奉する芸能は最大規模で代表的な浜下りである。当地方に手踊りなどの芸能が数多く残っているのは、お浜下りによるところが大きいと思われる。（会員　二本松文雄）

宝財踊り

Announce 事務局より

県内各地から集められた箕

事務局のある県立博物館では平成 28 年８月 19 日から 11 月 30 日までポイント展「いろんな“箕”集まれ！」を開催しました。小さなコーナー展示でしたが、県内各地から寄贈された箕が一堂に会しました。南相馬の小高箕や二本松の篠箕、奥会津の皮箕など県内でも地域ごとに異なる箕をはじめ、トタンやプラスチックの箕など時代を経て変化した素材の箕にも着目しました。さらに肥料運搬に使用する会津のエボや炭焼きに使われた炭ぶるいなど、用途の違いが分かる資料、さらに箕直しの職人によって修理された跡の分かる箕なども紹介し、時代、材料、機能など様々な角度から改めて箕について考える機会となりました。（事務局　内山大介）

notesから 「会津の三十三観音めぐり」日本遺産に認定

平成 28 年 4 月、「会津の三十三観音めぐり～巡礼を通して観た往時の会津の文化～」が日本遺産に認定された。日本遺産とは「地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリー」を文化庁が認定するもので、平成 27 年度に創設された。地域活性化を主な目的とし、実際の現場では観光面に重点が置かれているようだ。会津には「会津三十三観音」をはじめ、奥会津、猪苗代さらに城下の町廻り三十三観音といった霊場が存在し、また三十三観音の石仏群も多くみられる。それぞれの寺やお堂には少しずつ観光客も増えていると聞く。

しかし会津における三十三観音信仰は、多くの霊場の存在だけがその特色ではない。特に会津盆地から猪苗代地方にかけて、三十三観音めぐりは女性の暮らしに重要な意味を持ってきた。女性は嫁入りするとその地域の女性たちの前でナビロメ（名披露目）と呼ばれる儀式に参加し、同世代の女性数名がナカマッコ（仲間講）と呼ばれるグループを作って会津三十三観音めぐりに出かけた。会津盆地周辺では観音巡礼のことを「会津めぐり」と呼んだが、これを経験することでムラの一人前の女性として認められ、また観音講に参加することができた。つまり巡礼は結婚した女性にとっての通過儀礼としての意味を持っていた。

会津若松市郷之原の観音講

また観音講の集まりでは御詠歌のうたよみや飲食が行われるが、それは信仰的な行事であると共に、出産・育児のほか、地域生活の様々なことを習う機会でもあり、交流・情報交換の場でもあった。特に他所から嫁いだ女性たちにとって、観音講は地域の社会生活を支える重要な役割を果たしてきたといえる。（事務局　内山大介）

展示見学記 福島県立美術館「よみがえるオオカミ 飯舘村山津見神社・復元天井絵」

この企画展は 2016 年 5 月 28 日から 7 月 3 日にかけて開催された。「天井絵」という聞きなれない美術作品に視点を当てたこの展示は、作品の展示にとどまらず、多岐にわたる問題を提起している。これを企画した学芸員たちの力量に改めて敬服する。

飯舘村は東京電力福島第一原発による放射能汚染によって全村避難させられている。そうしたなかで佐須の山津見神社は平成 25 年春、火災に遭い、宮司夫人が亡くなり、社務所、社殿（拝殿）を失った。天井絵は 237 枚。拝殿の天井にあったもので、山御講では多年にわたり多くの人が出入りしていたにもかかわらず、これを作品として認識していた人は少なかったのではあるまいか。幸い火災に遭うひと月前にこれを記録していた研究者がおり、この記録をもとに天井絵の復元プロジェクトが始まったという。この企画展は復元プロジェクトの一つの道標であり、飯舘村復興のシンボルとして位置づけられていることから、従来の美術館見学者の枠を超え、多くの人の関心を集めた。復元には多くの美大生や研究者が関与している。また焼失した天井絵の主題であるオオカミの絵は、地方の画家の作品であり、ここには阿武隈高地の山の神信仰と眷属のオオカミとの関係を再考するヒントが隠されている。同時に、民間信仰を支えてきた画家たちの系譜や技法も再評価しなければならない。

創造的な作品であっても、民俗学的なアプローチが可能であり、これらの視点を取り込んでいく必要があることを改めて知った、有意義な企画展であった。（岩崎）

つぶや記

▼通信誌『ふぉーらむ・F』も 4 回目の発行となりました。現在は不定期刊行ですが、早く軌道に乗せて、定期的な刊行を目指していきたいと思います。会員の皆様の積極的な投稿をお待ちしています。▼先日、奥会津の廃校に収蔵されたまま未整理の民具を調査する機会がありました。周辺には解体待ちの空き家もたくさんあると聞いています。震災から間もなく 6 年になりますが、被災した有形無形の民俗文化財と同様に、過疎化などにともない顧みられず捨てられゆく民俗資料の救出・保全もまた喫緊の課題であることを最近改めて感じています。（内）

▼（内）氏が早々と編集を終えていたにもかかわらず、（岩）の対応が大幅に遅れ、発行がのびのびになってしまったことを会員諸氏と（内）氏にお詫びします▼県内各地ではフォーラム、講演会、講座、展示、催し物、出版活動が行われているはずなのですが、なかなか把握しきれないのが現状です。こうした情報をお伝えするのも私たちの役割だと自覚してはいるのですが…▼まもなく『福島の民俗』45 号も発刊されます（岩）

福島県民俗学会通信誌『ふぉーらむ・F』第４号
2017（平成 29）年 2 月 28 日発行
編集・発行　福島県民俗学会（会長　佐々木長生）
福島県会津若松市城東町 1 -25　福島県立博物館内
（〒 965-0807）　事務局担当：内山大介、大里正樹
通信誌編集担当：岩崎真幸、内山大介